

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18520047
 研究課題名（和文） 『婆沙論』の総合的研究
 研究課題名（英文） A General Study of Mahavibhasa
 研究代表者
 佐々木 閑（SASAKI SHIZUKA）
 花園大学・文学部・教授
 研究者番号：40225868

研究成果の概要（和文）：

説一切有部の代表的アビダルマ論書にして、仏教世界で最大の哲学書である『婆沙論』の基本的データベース構築を目指す総合的研究を4年間にわたって行い。その結果、「引用される経典類の出典解明」「引用される先行アビダルマ文献の出典解明」「三本の異訳間の詳細な異同対照表の作成」「いくつかの仏教哲学的問題に関する新たな知見の提示」とった諸点において成果を上げることができた。

研究成果の概要（英文）：

The author have studied Mahavibhasa, a representative abhidharma text belonging to the Sarvastivadin and the biggest philosophical book in the history of Buddhism aiming to construct a basic database of this text. As a result, I could accomplish the following four works: 1. Identification of the agama sutras referred in the Mahavibhasa. 2. Identification of the preceding Sarvastivada Abhidharma referred in the Mahavibhasa. 3. Making out of a correspondence table among the three different Chinese versions of the Mahavibhasa. 3. Presentation of some new problems of Buddhist philosophy found in the Mahavibhasa.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
総計	2800,000	630,000	3430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、 印度哲学・仏教学

キーワード：婆沙論、アビダルマ、阿含経、説一切有部

1. 研究開始当初の背景

従来の仏教アビダルマ哲学の研究は、

『俱舍論』を中心に行われてきたが、それは『俱舍論』が、内容的にきわめて整

然と構成されており、読みやすく、しかもサンスクリット、チベット、漢文という三本の資料が揃っているという好条件の故であった。仏教が日本に導入されてから千年以上の間、仏教哲学といえは『俱舎論』および、それを土台にして発展した唯識哲学が日本の仏教哲学の主流となってきて、『俱舎論』こそが仏教の神髄だといった通念が形成されてきた。南都に「俱舎、法相」といった宗派が存在していることが、その事実を端的に表している。しかしながら、その「俱舎、法相」の根底には、『阿毘達磨大毘婆沙論』という巨大な基礎が横たわっている。それは『俱舎論』の七倍以上の量を持ち、内容も『俱舎論』に比べてはるかに詳細で重厚な哲学書である。この『婆沙論』を理解することなく、その後のアビダルマ哲学を正しく理解することは不可能である。『婆沙論』こそは、『俱舎論』よりはるかに重要で必須の仏教哲学書ということができるのである。その『婆沙論』が、今まであまり研究されてこなかったという事実にはいくつかの理由がある。一つは、その量があまりに膨大だという点。一人の人間が全情報を頭に入れ、論理的に理解しながら読解していくには、『婆沙論』はあまりに膨大である。したがって、全体を包括的に理解することができず、当然ながら、それを次世代に教育していくこともできない。これが『婆沙論』が仏教哲学のスタンダードにならなかった第一の理由である。二番目の理由は、その内容にある。量が膨大であるだけでなく、議論がきわめて複雑に錯綜している。一つのテーマについて何十という異なる理論学説が脈絡なら語られる場合が多く、それを総合的に理解することができない。こういった理由により、『婆沙論』は、重要であることは認識されながらも、学問のベースとして利用されることがほとんどなかったのである。今回の研究は、その最重要資料である『婆沙論』を、最新の電子テキストなど、現代が生み出した種々のスキルを利用して解析し、今後の研究の土台となるデータベースを作成し、『婆沙論』を含みこんだ新たなアビダルマ研究の領域を開拓したいという動機が最初のきっかけであった。

2. 研究の目的

目的は、『婆沙論』を実際に読解し、複数の視点でその構造を解析し、多岐にわたる仏教哲学研究の要としてのデータベースを構築することにある。『婆沙論』を自在に利用することができるよう

になると、仏教研究でどういった利点があるのか、いくつか述べてみよう。まず、説一切有部のアビダルマ哲学の全容が明確化される。それによって、仏教世界で最も深い哲学体系を創生した説一切有部の持つ意味がわかってくる。また、その説一切有部と、唯識やあるいはその後の多くの大乘仏教思想とが密接に関連していることは、先行研究によって明らかにされているので、『婆沙論』研究によって説一切有部の全体像が解明されれば、自動的にその後の大乘仏教哲学の輪郭も明確になる。『婆沙論』研究は大乘哲学を理解するうえでも、必要不可欠な作業なのである。さらには、南伝のパーリ仏教と、北伝仏教の関係を探るうえでも『婆沙論』研究は要となる。最近の研究により、パーリ仏教の「論書」や「注釈文献」に、北伝資料の情報が色濃く反映していることが判明しつつある。この事実と、『婆沙論』研究の成果を関連させることにより、今まではほとんど顧みられることのなかった、南伝と北伝仏教の、アビダルマ時代の交流関係を明確にすることができるかもしれない。こういったいくつかの重要な点の基盤には「『婆沙論』をいかに自在に利用し、情報を得るか」という問題がある。それを解決し、誰もが容易に『婆沙論』の情報にアクセスし、他の領域と関連付けることが可能になるようなデータベースを作成することが、今回の研究の目的だったのである。

3. 研究の方法

『婆沙論』には三本の漢訳の異本がある。そのうち、有名な玄奘が訳した『婆沙論』は「新婆沙」と呼ばれ、利用されることもあったが、残りの二本に関しては仏教界においても、そして仏教学の領域においても無視されることが多く、ほとんど注目されてこなかった。しかし実際に読解してみると、それら二本には、玄奘訳に勝るとも劣らない、重要な情報が数多く含まれていることが分かってきた。しかしながら、すでに指摘したように、『婆沙論』そのものの量があまりに膨大であり、またその議論があまりに複雑なため、そういった貴重な情報をシステムティックの利用することが不可能だったのである。そこで本研究では、第一目標を、その三本の漢訳を自在に利用するためのデータベースの構築においた。そしてそのための基本作業として、三本の漢訳を詳細に読解し、内容が対応する箇所を綿密に洗い出し、「3バージョンの対照表」にした。この作業は非常な労

力を要したが、四年間まるまる使って、ようやく全調査を終えることができた。そしてさらには『婆沙論』と関連する『俱舍論』をはじめとした説一切有部系の諸アビダルマ文献、パーリ語および漢訳で残っている阿含経資料などを比較対照し、可能な限りのテーマで、体系的に一貫した情報体系を作成していった。これは一見、きわめて基礎的で単純な作業に思えるが、実際に内容を解説しながら読んでいくという、最も手間のかかる仕事を必要とする方法であり、四年間、ひたすらその作業の没頭することとなった。その結果は、このあとの4でも詳しく述べるが、「引用される経典」「引用される先行論書」などさまざまな視点での『婆沙論』データベースへと繋がっていった。

4. 研究成果

以上のような研究方法で作業を続けていった結果として、大きく分けて次の四項目に分類されるような成果が得られた。1. 「引用される経典類の出典解明」。2. 「引用される先行アビダルマ文献の出典解明」。3. 「三本の異訳間の詳細な異同対照表の作成」。4. 「いくつかの仏教哲学的問題に関する新たな知見の提示」。1に関しては、3本の『婆沙論』すべてにわたって、そこに引用されている経典を網羅的にピックアップして、それが阿含、二カーヤのどの経典のどの個所から引用されたものであるかを調査した。引用箇所は約1500か所にもなった。説一切有部の全阿含経典がセットとして残存していないこともあって、その1500か所の出典をすべて解明することなど現段階ではとても望むことはできないが、それでもおよそ30パーセントの出典を確認することはできた。残りについては関係研究者の協力も得て、さらに調査を続けるつもりである。2. はすべて完成した。「集異門足論」など、『婆沙論』に先行するアビダルマ文献からの引用箇所約500か所をすべて洗い出し、その出典を明らかにすることができた。これは近々、論文のかたちで発表するつもりである。3も、対照作業に関してはすべて完了している。そのうち、「新婆沙」と「旧婆沙」の対照表は量があまりに多くなるため、発表の機会がなく、待機中であるが、シタパーニ選『婆沙論』と「新婆沙」「旧婆沙」の間の対照表はすでに発表済みである。4については、極微や浄色などの問題に関して、従来の学界の説を覆す新説を提示することができた。たとえば極微については、従来、四大の融合したも

のが四大所造だという見解が学界の説であったが、今回、『婆沙論』および周辺のアビダルマ文献を精査し、さらにそこにパーリ仏教の知見を加味することで、四大と四大所造色が別個の粒子であり、それが20個同時に現れることを「八事俱生」というという事実が明らかになった。仏教哲学における原子論の変更である。こういった作業は『婆沙論』を精密に読むという作業で初めて可能になる。『婆沙論』研究の重要性を示すことのできる一事例であった。今後研究すべき課題も多く発見しているので、逐次研究を続行していくつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①佐々木閑、「A Basic Approach for Research on the Origins of Mahayana Buddhism」、Acta Asiatica、Vol. 96、pp. 25-46、査読有、2010年3月
- ②佐々木閑、「五色根は透明か」『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』第7号、1-16ページ、査読有、2009年5月
- ③佐々木閑、「有部の極微説」『印度学仏教学研究』第57巻第1号、211-217ページ、査読有、2009年3月
- ④佐々木閑、「婆沙論諸本の相互関係」『印度学仏教学研究』第56巻第1号、167-173ページ、査読有、2007年12月

[学会発表] (計6件)

- ①佐々木閑、「阿闍世国経にみられる修行観」、元暁学会、韓国慶州・東国大学慶州キャンパス、2009年11月14日
- ②佐々木閑、「五色根の形状」、日本印度学仏教学会、愛知学院大学、2008年9月5日
- ③佐々木閑、「婆沙論研究の意味」、結集仏教学大会、韓国ソウル・東国大学校、2008年5月17日
- ④佐々木閑、「大乘仏教の起源に関する研究方法」、北海道印度学仏教学会例会、北海道大学、2007年12月1日
- ⑤佐々木閑、「婆沙論諸本の相互関係」、日本印度学仏教学会、四国大学、2007年9月5日

日

⑥佐々木閑、「Cellibacy in Ancient Indian Buddhism」、Celibacy and Enlightenment
学会、韓国・高麗大学、2007年8月3日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 閑 (SASAKI SHIZUKA)
花園大学・文学部・教授
研究者番号：18520047

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当なし